

て民衆と出会っていたところにキリスト教の原点がある。「弱さ」「傷つきやすさ」において解放への同伴者となりうる新たな司祭職理解は、男性司祭主義の克服、家父長的キリスト教克服のための重要な課題であり、これはキリスト教の内部の問題だけではなく、他の宗教や様々な運動体のネットワークに支えられながら取り組まれる課題といえるだろう。

女性聖職者の按手をめぐって

——在日大韓基督教会の事例——

李 恩子

本発表は戦前の在日朝鮮人社会（戦前は朝鮮半島が分断されていたため南北の総称として用いる）で唯一設立された基督教宗団である現在日大韓基督教会（Korean Christian Church in Japan 以下KCCJと記す）の歴史とその特性を概観し、教団内における女性牧師・女性長老の按手をめぐる時代的制約と女性たちの貢献を検証する。検証する大きな枠組みはエスニシティとジャンダーの交差する視点である。言い換えれば「民族解放」と「女性解放」の緊張関係である。この二つの概念はKCCJの歴史において、同質の重みとして捉え実践されてきたのだろうか？あるいは相反するものとしてあったのか？あるいは、相互に拮抗しながらも互いに影響し合っていたのだろうか？この議論を展開するために、女性牧師・長老按手の案件がいくたびも浮上しては挫折した一九七〇

年代の教団内外の「民族」にまつわる人権運動と教団内の女性たちの役割、働きをまず素描する。そして、女性牧師輩出に至らせた背景と要因を探り分析する。具体的な方法としては、当時発刊された、教団女性の機関紙コゲ（峠）の中に現れる教団女性たちの声、つまり、教団女性の活動として、また、一人の女性として教団に、社会に何を求めていたのかを考察し整理するなかで、女性たちの主体回復と教団変革への参加の道を結論として描き出そうとするものである。

パネルの主旨とまとめ

川橋範子・小松加代子

本パネルでは、教団の内部にも場を持つ研究者たちが、宗教研究にジェンダーの視座を導入することにより、女性の宗教的主体の構築とその解釈のあり方を考察する。宗教に信者として参加する女性が多い反面、聖公会の「男性司祭主義」、仏教教団における女性の従属化など、宗教における女性の周辺化は顕著である。現在、女性たちは教団内外で改革を求めさまざまな運動を行っている。宗教活動に従事する者たちの価値体系の形成は、教団内の孤立した環境で行われるのではなく、教団外部を含む多様なネットワークによって影響を受け、変化を遂げる。本パネルは、正統的な宗教の権威から排除されてきた女性の宗教的主体性の問いを再検討し、女性たちが、どのようなネットワークを構築し、どのような規範を受け止め、どのような